

保育現場における音楽療法的活動導入についての一考察 ～平成 25 年度 3 歳児の活動から～

内田礼子(久良岐保育園) 鈴木泰子(聖セシリア女子短期大学)

はじめに

神奈川県横浜市の K 保育園では、8年前から月に1度の割合で講師を招き音楽療法的な活動を行ってきた。音楽療法的活動とは、(クラス全体や個々の)目的に向かって音楽を使ったプログラムを行ない、日常生活に還元していこうという試みである。ここでは平成 25 年度 3 歳児の成果を報告していきたい。

音楽療法定義

日本音楽療法学会による定義は次のように定められている。

「音楽療法とは、音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用することをさすものとする」

方法

- 1) 保育園全体の目標を「よく観る」「よく聴く」の二点に掲げている。3 歳児クラスでは音楽療法的活動を各月 1 回 30 分ずつ行なった。(平成 25 年 4 月～平成 26 年 1 月までの 9 回)
- 2) 毎回活動後のクラスの様子、および次回までの担任への課題等について話し合いを行なった。(午睡時間を利用)
- 3) 活動当日の記録に加え、1 ヶ月の子どもの様子を担任が記入し、次回音楽療法的活動直前に園長より講師自宅に郵送し、次のプログラムを設定していった。

プログラム1)「スズ」を音を出さずに隣へ回す活動

この活動の目的は「ゆっくりしていねいに」である。丁寧さとともに状況を良く把握することも求められる。この活動をすることと同時に通常の保育の中でも「ゆっくりしていねいに」物事に関わるよう担任は言葉がけを行なった。

プログラム2)リズムに合わせボールを担任が両手で投げ子どもが受け取る活動

この活動は大人から子どもへボールを投げるものであるが、ボールの大きさ、柔らかさは子どもの様子によって変えていった。相手が受け取り



やすいようにボールを両手投げするよう声をかけて行なった。

プログラム3)ハーブを自らならす活動

アイリッシュハーブをひとりずつ自分の指でならし、音に耳を傾けることを活動として行なったが、周囲がうるさいと小さな音は聞き取れない。クラス全体が集中して耳を傾けるよう留意した。



考察

プログラム1)～3)の活動の目的は前述したように周囲や状況をよく観ること、そして小さな音をよく聴くことである。これらの活動を行なうと同時に保育の中で様々な生活場面においても同じような視点で物事をとらえるよう担任や園長、主任と連携を取っていた。その結果、今年度 3 歳児クラスでは、「物を大切にできるようになった」「そっと椅子をしまえるようになった」「給食の食器の扱いが丁寧になった」、或いは、「自分中心ではなく、相手の気持ちを考えることの材料になった」と担任より報告があった。



音楽療法はあくまでも「音楽」の特長を活かし不適切行動の減少や生活の質の向上に向けようというものである。担任と連携した目標設定が行動変容に繋がったと推測される。

まとめと今後の課題

今回は平成 25 年度 3 歳児のわずかな報告であるが、過去 8 年間の手ごたえとしてこの「よく観る」「よく聴く」という 2 点の目的は「集中力」や「話を聴くことができる」につながることを感じる。

しかしながら、この活動を行なうに当たっては園長や理事長の理解が必須であること、そして保育者がその意図を理解して日常の保育に応用していくことが求められる。今後は内容をよく吟味しつつ 継続的な活動を行っていきたいと考えている。